

1 題材 「Image～心の変化を形にしよう～」

2 指導観

- 美術史に燦然と輝く抽象表現主義の功績は、内面感情を様々な形態や方法であらわす可能性を示したことにある。興味や好奇心から探究の根を伸ばし、自分なりの答え（作品）を創造する過程にある造形的なものの見方や考え方はVUCAの時代を切り開く新たな発想力や企画力に通じる。

本題材は、自分の心の内面感情を立体造形作品として制作する活動を通して、目では見えない心や感情から主題を生み出し、形態や量感などの造形要素と関連付けて構成を工夫するとともに、自己を象徴する形態を追究させることをねらいとしている。学習内容としては、美術史における抽象表現の変遷、作者の制作意図と造形的な特徴との関連性、作品の量感・質感の表現の発展性、面取りの方法、凹凸と陰影の関係、研磨の手順と方法、研磨による質感の違い、造形要素を基にした表現意図の具体性などがある。思春期を迎える中学生の発達段階において、自己の内面の変化を捉えることは容易ではない。そのような抽象的なイメージを、立体制作では形を変形させたり、そぎ落としたり、塊やねじれやバランスによって動きや安定感、緊張感等を表現できる。造形的なイメージや作風といった森を見る視点と、素材や形、量感などの木を見る視点とを往還させながら、頭だけでなく手や眼といった身体の諸感覚を総動員して思考させる本題材は意義深い。

- 本学級の生徒は、これまでにおおまかな美術史を大観する中で、芸術家の探究の視点について学習している。特に印象派については、芸術家たちが追い求めた表現方法と時代背景との繋がりについて学習を行っている。事前アンケートでは、「自分をテーマに絵や立体で表現すること」について、〇%が「苦手」と答えた。主な理由としては「どのように表現したらいいかわからない」「思い通りに描いたり作ったりすることができない」などがあつた。また、抽象表現については、「見るポイントを探すことが難しい」「考え方がわからない」などの理由から「よさがわからない」と答えた生徒が〇%であつた。これらのことから本学級の生徒は、創造したことなどを基に主題を生み出す「イメージする力」や、自分の表したい表現世界を創造的に構成する「構想する力」に苦手意識があることが分かつた。「イメージする力」は、土台となる自己の経験と造形的な視点とを関連付けることで磨かれる。「構想する力」は、イメージされて表出した主題を基に、スケッチや簡易的に扱える材料などを用いて表し、徐々に深められる。抽象表現はそうした創造活動の営みの中で自分と向き合い、自分なりの答えを導き出そうと試行錯誤を重ねた過程で生み出される。以上のことから、本題材は、既習事項である美術史の追体験としても価値高い。

- 本題材の指導にあたっては、学習課題である「心の中にある感情」について、自分の経験を基に主題を生み出させ、様々な方法や材料で自分なりの表現を粘り強く追究させたい。そのためにまず、制作の見通しを立てさせる。ここでは、彫刻作品が見る角度によって印象が変わることに気付かせるために、パブリックアートを例示する。次に、作品の構想を練らせる。ここでは、生徒が自分の考えに沿って構想を整理・修正させるために、参考資料やアイデアスケッチ、試作品データを学習シートに集約させ、構想を練る場面や振り返りの場面で文字や図で思考の流れを記録するよう促す。また、意見交流の場面では、班員の意見を学習シートに直接記録させるために、描画機能を活用し、完成予想図画像に班員のアドバイスごとにレイヤー分けしてペイントするよう指示する。さらに、作品を制作させる。ここでは、粗削りの手順をつかませるために描画機能を活用し、展開図に彫る部分を記して加工後の写真と比較するよう指示する。また、他者の表現を参考にさせるために、各自が記録している学習シートと使用している工具の情報をクラウド上で共有し、随時閲覧できるよう仕組む。最後に、作品を鑑賞させる。ここでは、作者の制作意図と思考の流れを把握させるために、完成した作品と学習シートを合わせて鑑賞するよう指示する。

3 目標

- 石彫の特徴を踏まえて計画的かつ安全に道具を使用し、立体造形することができる。
- 自己の感情（心）のイメージから主題を生み出し、素材や形の特徴などから構想を深め、他表現の意図に合った表現方法を選択して豊かに表現することができる。
- 多様な抽象表現に関心を持ち、形態や作者の意図から立体表現の面白さに気付くとともに、自己の内面を立体彫刻としてあらわそうとしている。

4 計画 (9時間)

知：知識・技能 思：思考・判断・表現 態：主体的に学習に取り組む態度

次	配時	学習活動・内容	手だて (○) 研究に関する手だて (◎)	評価規準
一	1	<p>1 学習課題をつかみ、制作の見通しを立てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 絵画作品と彫刻作品の造形的な違いと抽象表現における共通点 ・ 作品に込められた作者の意図や願い 	<p>○ 彫刻作品が、見る角度によって印象が変わる立体的な表現形式であることに気付かせるために、パブリックアート(現代美術作品)を例示する。</p> <p>○ 抽象作品に込められた作者の意図や願いを感じ取らせるために、作品の形や色に着目させて、そのイメージを問う。</p>	<p>態：抽象彫刻の形や多様な表現方法から、作者の制作意図を探ろうとしている。</p>
		<p>学習課題 あなたの心の中にあるモヤモヤやウキウキ、ワクワクといった感情に名前をつけて、それを彫刻作品であらわそう。</p>		
二	3	<p>2 作品の構想を練る。</p> <p>(1) ~ (2) 自分なりの方法で作品を制作する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 作品主題と作品名の整合性 ・ 作品制作の見通しの立て方 	<p>○ 学習課題に対して素材の特性から形のイメージを具現化しやすくさせるために、構想段階から高嶺石を配布する。</p> <p>◎ 生徒が自分の考えのおもむくままに構想を整理・修正させやすくするために、参考資料やアイデアスケッチ、試作品データを学習シートに集約させ、構想を練る場面や振り返りの場面で文字や図で思考の流れを記録するよう促す。</p> <p style="text-align: center;">【A3】【B3】【B6】</p>	<p>知：素材から受けるイメージと作品主題とを触覚の要素をつかって説明することができる。</p>
	本時	<p>(3) 途中経過を基に意見交流する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 作者の制作意図と造形的な特徴との関連性 ・ 作品の量感・質感の表現の発展性 	<p>◎ 量感の造形的変化がもたらす効果(アドバイスの根拠)を疑似体験しながら交流させるために、描画機能とレイヤー機能を活用し、試作品画像に直接描画やアドバイスを書き込みながら交流するよう指示する。その際、作者の要点や異なる意見が混在しないようレイヤーを分けて記録するよう促す。</p> <p style="text-align: center;">【C6】</p>	<p>思：作品主題に対して、形や量感、質感などの造形要素を効果的に取り入れた構想を深めることができる。</p>
三	4	<p>3 構想を基に作品を制作する。</p> <p>(1) ~ (2) 構想を基に作品を粗削りする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 面取りの方法 <p>(3) 細部を作りこむ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 彫刻によってできる凹凸と陰影の関係 <p>(4) 研磨して仕上げる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 研磨の手順と方法 ・ 研磨による質感の違い 	<p>◎ 粗削りの手順をつかませるために、展開図画像のそれぞれの面にペイントソフトで彫る部分を記し、加工後の写真を並べて比較するよう指示する。</p> <p style="text-align: center;">【B1】</p> <p>◎ 他者の表現方法を制作時の参考にさせるために、クラウド環境を利用し、各自が記録している学習シート(作品画像)と使用している工具の情報をクラウド上に上げて共有し、随時閲覧できるよう仕組む。</p> <p style="text-align: center;">【B3】</p> <p>○ 作品表面の質感にこだわらせるために、研磨した表面をさわらせて、触感でザラつきに気付くか問う。</p>	<p>知：制作の作業計画に基づいて、必要な粗削りを施すことができる。</p> <p>思：作品制作の進め方や課題解決方法を他者の学習シートを参考にして、デザインに反映させることができる。</p> <p>知：主題にふさわしい表面加工を施すことができる。</p>
四	1	<p>4 完成作品を鑑賞する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 他者作品の造形的な美しさと主題の意図 ・ 造形要素を基にした表現意図の具体的根拠 ・ 今後に活かせる思考方法 	<p>◎ 作者の制作意図と思考の流れを把握させるために、完成した作品と学習シートを合わせて鑑賞するよう指示する。</p> <p style="text-align: center;">【C1】</p> <p>◎ 自他の作品において、完成までの思考の流れが他の題材でも活かせるように、考えが変わったタイミングとその理由を一例挙げて説明するよう助言する。</p> <p style="text-align: center;">【C6】</p>	<p>態：抽象表現の多様性や思考方法を今後の制作に活かそうとしている。</p>

5 本 時 令和3年〇月〇日 (〇) 第2校時 計画 第二次の3 美術室にて

(1) 主 眼

○ 作品構想について他者と意見交流する活動を通して、表現意図を量感の効果を踏まえて説明することができる。

(2) 準 備

- ①題材計画表 ②「坐禅」画像資料 ③「無題」画像資料 ④イメージマップ ⑤生徒試作品
⑥振り返りシート

(3) 過 程

学習活動・内容	準備	手だて (○) と研究に関わる手だて (◎) 評価 (◇)	形態	配時
1 めあてをつかむ。 ・抽象表現の形の多様性 めあて 感情をより色濃くあらわす形を追究しよう	① ②	○ 作品の形が与える感情効果を捉えさせるために、イサムノグチの作品「坐禅」を提示し、緊張感や集中力といった雰囲気は作品のどこから感じられるか問う。	一斉	7
2 作品構想を整理する。 ・感情の再現性 ・量感がもたらすバランスや動静	③ ④ ⑤	○ 量感がもたらすバランスや動静を捉えさせるために、「無題」の画像資料を提示し石から漂う存在感がどこから感じられるか問う。 ○ 交流の視点を捉えさせるために、作品「坐禅」と「無題」から、「量感＝全体像」と「要点＝部分」の関係性を確認し、要点をより際立たせる量感の在り方を問う。	個	8
3 学習シート (イメージマップ) と試作品を基に意見交流する。 ・作者の制作意図と造形的な特徴との関連性 ・作品の量感表現の発展性		◎ 交流の際、制作意図を主張しやすくさせるために、試作品画像の要点部分に描画ペイントで印を付け、イメージマップに添付するよう指示する。 【B1】 ○ 作品 (造形) のイメージと作者の制作意図を基に交流ができるように、試作品とイメージマップとを合わせて説明するよう促す。 ◎ 量感の造形的変化がもたらす効果 (アドバイスの根拠) を疑似体験しながら交流させるために、描画機能とレイヤー機能を活用し、試作品画像に直接描画やアドバイスを書き込みながら交流するよう指示する。その際、作者の要点や異なる意見が混在しないようレイヤーを分けて記録するよう促す。	班	25
4 改善方法を検討し、次時以降の計画を立てる。 ・表現意図と量感の関連の多様性 ・今後のおおまかな制作の流れ	⑥	◎ 交流によるアドバイスによって、アイデアが深化した (変化したり、思考が強化されたりした) ことを捉えさせるために、参考例として生徒作品のアイデアシートを提示し、深まったきっかけを作者に問う。 【B6】 ◇ 作品の表現意図の根拠として、量感の造形要素を挙げてその効果をバランスや動静などの特徴と関連付けて説明することができるか。 ＜学習シート分析＞	一斉 ↓ 個	10